

読む湘南

2011
Dec

～少しだけためになる海の話～

～CONTENTS～

◆創刊にあたって

湘南ビジョン研究会代表
片山 清宏

◆湘南の海を考える

ミニフォーラム
REPORT

◆海楽主義

ドジ井坂さん

◆そうだったのか!

そもそも海水浴って何だ?

◆海外のブルー

フラッグ事例
NZ・オアクラ海岸

◆海の法律を学ぼう

海洋基本法

◆美味しい湘南

片瀬・忠兵衛

「創刊にあたつて」



湘南ビジョン研究会

代表

片山 清宏

私は藤沢市鵠沼で生まれ鵠沼で育ちました。自宅から海まで自転車でわずか5分。海は小さい頃から私にとって身近な遊び場でした。高校1年の時から「シルフィード」というウインドサーフィンのスクールでウインドを始め、大学に入つてからはサーフィン三昧。当時は年間300日以上海に入つて、大会で勝つことを目標に一生懸命やつていきました。サーフィンと一緒にやつてきた17、18年来の友人をはじめ、海の仲間もたくさんできました。

かけがえのないものを私に与えてくれた「湘南の海」。この「湘南の海」を生かしたまちづくりをテーマに、地元の仲間の協力を得て、このたび「湘南ビジョン研究会」をスタートさせました。そして、この「湘南ビジョン研究会」の輪を広げ、より多くの皆様とともに歩んでいくための情報発信ツールとして、「読む湘南」「少しだけためになる海の話」を創刊することにしました。

湘南地域は、緑の豊かな自然と多くの伝統文化に恵まれた魅力的で活気のある地域ですが、一方で河川や海の汚染、海岸のゴミ問題などの環境問題が深刻化しているのが現状です。また、津波や放射能を含めた防災対策、漁業や観光等の産業振興、さらに海岸浸食、不法投棄、防犯・治安、交通渋滞、環境教育への取り組みなど様々な課題があります。

「湘南ビジョン研究会」では、これらを多面的に勉強していく、どうすれば湘南の資源である「海」を最大限に生かした理想のまちづくりができるかを考え、最終的には10年後の湘南地域のまちづくりビジョン「湘南都市構想2022」を作成していきたいと思っています。

さらに実践的取り組みとして、きれいで安全で活力ある湘南の海を実現するため、海岸の国際環境基準「ブルーフラッグ」の認証取得を目標に掲げ、地域が一体となって活動できる環境をつくっていきます。その場づくりの1つとして「湘南の海を考えるミニフォーラム」を毎月開催し、地域住民や関係団体が相互に議論し、理解・協力し合うことができる活動をしていきたいと考えています。

これらの活動はすべて、毎月1回発行する「読む湘南」で逐一ご報告するとともに、地元湘南の文化、歴史、海に関する情報を織り交ぜながら発信していきます。

「読む湘南」の創刊にあたり、貴重な時間を割いて様々なアドバイスをくださった多くの皆様に、あらためて感謝申し上げます。これから「湘南ビジョン研究会」の活動に是非ご期待ください!

2011年12月1日



私たち「湘南ビジョン研究会」は先月11月から毎月1回の予定で「湘南の海を考えるミニフォーラム」を開催しています。「読む湘南」ではフォーラムの内容を毎回フォローしていきます。

2011年11月16日 第1回テーマ

湘南の海を生かしたまちづくり

講師 一般社団法人
FEE Japan代表理事 伊藤 正侑子氏
「FEE (Foundation for Environmental Education)
～ブルーフラッグプログラムとは～」

■ブルーフラッグとは

ブルーフラッグとはビーチとマリーナのエコラベルのことです。世界で最も古い環境認証です。海岸の持続可能な発展を目指すもので、観光業と深く関係しています。国際環境教育基金FEEの5つあるプログラムの1つです。

近年の観光業の大きな問題点として、観光客誘致の立場から施設などの開発を進めたい人たちと、観光客の増加にともなうゴミなど環境の悪化を懸念し、それを保全する立場の人たちが対立関係にある、ということが挙げられます。相互が発展していくためには

どうすればよいか、という問題意識からブルーフラッグは生まれてきました。

ブルーフラッグは1985年にフランスで、87年に欧州4カ国でスタートしました。その後、欧州各国に広がり、97年には欧州外（南アフリカで開始）にも拡大しました。南アフリカがブルーフラッグを導入した理由は欧州からの観光客を誘致するためでした。当時、ブルーフラッグは欧州すでに広く認知されていたからです。2011年現在、46の国と地域で3650のビーチやマリーナが認証を受けています。

ブルーフラッグを認証する団体がFEEです。国連環境計画（UNEP）、世界観光機関（UNWTO）、EUなどと提携しています。環境教育を通して持続可能な開発を促進することを目標とした非営利・非政府組織です。FEE Japanは2007年6月に日本におけるFEEの活動を統括する団体として認証されました。アメリカではなく欧州に起源を持つ組織だからでしょうか、WWFに並ぶ規模の組織であるにも関わらず、日本での認知度は低いのが現状です。

■ブルーフラッグの持つ意味

ブルーフラッグプログラムは「水質」「環境教育と情報」「環境マネジメント」「安全性やその他のサービス」の4項目について厳しい基準を通して、ビーチやマリーナの持続可能な開発を目指しています。「持続可能な」というのが非常に大切なビジョンです。その目的は以下の6つに大別されます。

- ・ビーチとマリーナの使用者への環境プログラムの促進、参加促進
- ・所有者への安全と環境マネジメントシステムの実現
- ・人々の活動による影響を減らすための環境状況の監視
- ・持続可能な観光開発への働きかけを共同の活動で促進
- ・沿岸環境についての理解を深めること
- ・地元当局やそのパートナーの意思決定プロセスに、環境問題への取り組みを組み込んでいくこと

つまり関わる人すべてを巻き込むことで沿岸環境について理解を深めていくというものです。環境教育がプログラムの中心ですが、これは子供たちへの教育だけではありません。ここでの教育とは生涯をかけて行っていくもので、ともに学びとともに築き共有して問題を解決していくことを意味します。



ブルーフラッグのロゴ

【次ページへ続く】



日本プロサーフィン選手権初代チャンピオン

海での暮らしを日々楽しむ方々をゲストに招く「海楽（かいらく）主義」。1回目は月刊「サーフィンライフ」の連載「サーフィン・スクール」でおなじみのドジ井坂さんにお話をうかがいました。日本を代表するレジェンドサーファーであると同時に、現代サーファーの必読書「サーフィン・クリニック」を生みだした理論家でもあるドジさんは、自称「海おやじ」「山おやじ」。ジャンルにとらわれず、アウトドア全般の遊びやレジャースポーツをテーマに活躍されています。

ドジ井坂さん

——まずはお名前の由来から。

「1969年の全日本サーフィン選手権で優勝してね。日本人として初めて世界選手権に出ることになったんだ。場所はメキシコ。ところが、いざメキシコに着いてみたら大会自体がすでにキャンセルされて、翌年に延期されちゃってたんだ。それを知らずに行っちゃったんだよ。この失敗がアメリカの『Surfer』誌に「ドジをした日本のチャンプ…」という記事で紹介されて、アメリカ本土やハワイのサーフィン仲間から「doji」のニックネームで呼ばれるようになっちゃったんだ（笑）」

1980年にプロ競技から引退した後は「サーフィンワールド」誌の編集長やA S P（世界プロサーフィン運営組織）理事などを歴任。テレビやラジオでサーフィンだけでなく世界の海岸の様々な環境問題やビーチ&リゾートの情報を広く発信してきました。1989年には運輸省ビーチ・マリン研究会委員に就任するなど、公的機関からも大きな信頼を得てきました。

——ドジさんは海の「通年利用」という考え方を提唱していますね？

「20年くらい前に日本で初めて海を通年楽しむコミュニティボランティア組織「ひらつかビーチクラブ」をつくった。サーフィンはもちろん、ウインド（サーフィン）、カタマランヨット、スキムボードといった海遊び、ビーチバレー、ビーチサッカー、ビーチドッジボールとかのビーチ遊びをひっくりめて「ビーチスポーツ」って呼ぶんだ。海は夏だけじゃない。色々な海の遊びをみんなで楽しもうってことだよ。2004年に「ビーチクラブ全国ネットワーク」事務局をつくって、今は千葉、徳島、東京、静岡、福井など全国に11のビーチクラブがあるよ」

↗

【前ページから続く】 1987年に欧州で本格的に始まったブルーフラッグプログラムは南アフリカを経て、2004年にカリブ海へと広がりました。その後、昨年までにブラジルやカナダ、モロッコ、チュニジア、ニュージーランドなどで実施されています。しかし、アジアではまだ1つのビーチも認証されていません。

ブルーフラッグの認証を得るには前述した4つの厳しい基準をクリアしなければなりません。そしてそれらもあくまで義務基準であって、認証後もさらなる高み、指標基準を目指して日々状況を改善させていく必要があります。世界的に見ても環境基準が厳しい北欧などで承認された基準は、アジアにとって非常に高い壁と言わざるを得ません。

ではタヒチのボラボラ島と日本が同じ基準かというと、それは置かれている環境が違いますから単純比較することはできません。地域において最善と思われる基準を独自につくることが認められています。ですから日本に則した日本版の基準、アジアのほかの国々が今後指標とするような認証基準をつくっていきたいと思っています。

■ブルーフラッグが観光にもたらす影響

タヒチの空港にはフランス、タヒチの国旗とともにブルーフラッグ（文字通り青い旗）が掲げられています。認証を得ることができた「誇り」ですね。観光客に信頼感を与えることができるため、観光産業が中心となっての取得が増えてきています。フォーシーズンズのようにホテルで取得するところもあります。また、フランスではブルーフラッグの情報が

海は夏だけじゃない。色々な海の遊びをみんなで楽しもうってことだよ

——なぜ「ビーチクラブ」の活動を始めたのですか？

「日本には子供の頃から海を経験する環境が乏しい。行政も専門家も総合的に海を知らない。サーフィン、ライフセービング、ヨット、ジェットスキー、ビーチバレーなどの各分野が縦割りになっていて、またそれぞれ分野ごとに①コア層（専門家・プロ）②セミコア層（ショップ・各分野ごとのつまり場）③ファン層（海を楽しむファミリー・個人）④パブリック層（機会があれば海を楽しみたいと思っている人）に分かれてる。これらの分野はコア層が牛耳っているのが現実で、縦にも横にも連携がないんだ。だから日本の海がレジャー化できない。コア層中心の活動からファン層を育成して、さらに一般の人たちが参加しやすいビーチをつくりたいんだ。だからビーチクラブはファン層のために活動してるって言えるよね」

——またドジさんは最近、「海岸学」という学問を提唱しています。初めて聞く言葉ですが？

「今までの日本の海に関する学問っていうのは海洋工学とか海岸工学みたいな海をハードとしてとらえるものがほとんどだった。海と陸、海と人々の生活との接点である「海岸」について総合的に考える学問がなかったから色々な問題が起ったんだと思うよ。海岸の浸食とか防災・減災、海に親しむための海岸教育の少なさ、水難事故の増加、ごみ問題、海岸利用の対立問題…。どれも解決どころか深刻になるばかりでしょ？だからそれぞれの分野の専門家を一同に集めて、みんなで解決しようやってこと。海岸に関する問題の現状把握とそれに対する知恵を総合的に結集させたのが「海岸学」。全く新しい学問体系だけど、今はその組織をつくるために頑張ってる」



子供のようなキラキラの笑顔で語ってくれたドジ井坂さん。話の内容は湘南の海が抱える問題点についてなのに、ドジさんならば解決してくれるはず、と思わずにはいられない底抜けの明るさと魅力を感じました。周囲の誰からも慕われ、親しまれる理由が分かった気がします。

「湘南ビジョン研究会」の活動趣旨にも賛同していました。湘南海岸の様々な問題の解決に、今後連携して取り組んでいければと思っています。ドジ井坂さん、この度はお忙しい中、ありがとうございました！

ホームページにアップされ、休暇前にどのビーチが認証を受けているか確認してから海水浴に行くのがトレンドになりつつあります。またGoogleはGoogle Map上でブルーフラッグ・ビーチを検索できるようにすることを検討しています。

■なぜ今まで日本でブルーフラッグが行われなかつたのか

海で利益を得る人が多く、利害関係が縦割りであることが大きな理由です。前述したように、ブルーフラッグは海に関わる人々が相互に発展していくかなければ意味がありません。今日このフォーラムに参加して、今まで「このビーチでブルーフラッグを取りたい！」という強い思いを持った人が現れなかつたからうまくいかなかつたのではないか、と思いました。ブルーフラッグの説明会にこれほど多くの人（約70名）が集まつことはかつてありませんでした。年齢層に幅があり、様々な分野の方がここに集まっています。みなさんの気持ちが1つになることで、次のステップへと進めるのではないか。FEE Japan代表理事として大いに期待します。



第1回フォーラムの出席者



そもそも「海水浴」ってなんだろう？

日本では鎌倉時代の医療行為『塩浴』が起源

湘南地域は海水浴場やサーフポイントが点在するレジャースポットとして人気を集めています。周辺に暮らすあなたも、家族や友人との海水浴の思い出をいくつもお持ちではないでしょうか。

海水浴とはいつから始まったのでしょうか。

その起源は17世紀のヨーロッパにさかのぼりますが、一般に広まったのは18世紀中頃～後半。イギリス、フランス、ベルギー、オランダなどに広まっていきました。当時は温泉浴と同じく、健康の維持、回復を目的に医師から処方されて出かけるものだったようです。

日本では鎌倉時代初期に現在の愛知県で医療の一環として行われた「塩浴」が起源と言われています。広く知られるようになったのは幕末のこと。西洋医学を学んだ医師たちによって広められました。当時の海水浴は遊泳を楽しむものではなく、支柱を立ててそれにつかまり、ただ海水に体をひたしてつかったり上がりたりを繰り返すことで病気を治療しようという「湯治」に似た医療行為でした。

開国とともに外国人が広めた海水浴文化

1858年（安政5年）、江戸幕府は日米修好通商条約を皮切りに、諸外国と修好通商条約を締結します。来日した欧米を中心とする外

国人は蒸し暑い日本の夏を快適に過ごすため、休暇で海岸地帯を訪れて海水浴を行っていたと言われています。当時の外国人たちは「外国人遊歩規定」により、居留地から一定距離の範囲でしか自由に行動できませんでした。関東に設置された居留地（横浜・築地）で暮らしていた外国人は、現在の横浜市金沢区、富岡の地を利用していました。富岡は遊歩規定範囲に含まれていたことに加え、1872年（明治5年）に東海道鉄道が新橋一横浜間で開通していたため、休暇を過ごすには好都合でした。次第に財界人や華族など日本人の上流階級も避暑に訪れるようになり、長期滞在のための別荘が横浜周辺の東京湾沿岸部に建設されました。

海水浴は鉄道の開通で一気にその範囲を広めていきます。1887年（明治20年）、東海道鉄道が横浜から国府津まで営業距離を延ばしたこと、由比ヶ浜、鵠沼、大磯といった相模湾の海水浴場にも多くの人が訪れ賑わうようになります。特に大磯海水浴場は大磯停車場から歩いて行かれる距離にあったことから、人力車や小舟を利用して移動する富岡海水浴場よりも人気となりました。アクセスが容易になったことで、上流階級だけでなく庶民でも海浜部で余暇を楽しむことができるようになりました。

海水浴は病を癒すという目的から遊泳を楽しむものへと次第に変化していったわけです。

明治43年、江ノ電の全線開通で「湘南」大ブレーク！！

1902年（明治35年）に江ノ島電気鉄道が藤沢一片瀬間で営業を開始し、1910年（明治43年）には小町までの全線が開通。海水浴客に加え、江ノ島参詣を目的とする人々にとっても移動が楽になりました。江ノ島、藤沢、鎌倉の周遊ルートが完成すると、東京からでも日帰りや一泊二日で楽しむことができる手軽な行楽地として人気を博していきます。明治時代に東海道鉄道の延長によって結ばれた相模湾沿の地域、いわゆる「湘南エリア」は夏場の海水浴に限らず、1年を通してマリンスポーツのメッカになりました。

湘南に暮らす私たちは海で遊び、多くの思い出をつくることができます。まだ歴史の浅い日本の「海水浴」。海をよりいっそう愛し、これから何十年、何百年と美しいビーチを守っていきたいものです。

＜参考文献＞

アジ歴 海水浴の誕生～余暇は湘南の海で～
湘南の誕生 （藤沢市教育委員会、2005年）
鉄道の開通と「湘南」のイメージ形成
(大矢悠三子)

2007年取得ニュージーランド オアクラ海岸



ニュージーランド北島の西側に位置するタラナキ地方。富士山を思わせる単独の頂（いただき）、タラナキ山（標高2518m）が海岸からそそり立つ自然豊かな地に、サーファーや家族連れに人気の海岸がある。2007年、オアクラ海岸がオセアニアで最初のブルーフラッグを取得した。



富士山にも似たタラナキ山
※写真はNZ政府観光局HPから

取得にあたりオアクラ海岸は運営協議会を設立。地域の企業や行政、NPOなどがメンバーとなり、長期的な視点で持続可能な海岸の運営について話し合った。例えば障害者用の駐車場やリサイクルのためのゴミ箱、水質を含む環境調査、そして未来への海岸運営計画などだ。オアクラ海岸ではブルーフラッグを取得したことにより、まず地域のビーチクリーニングがスタート。川辺への植樹で水の浄化作戦が行われ、地域の学生による水質検査や無脊椎動物の研究も行われるようになった。環境教育の一環としての野外活動が実施され、多くの人が海岸を訪れるようになった。

オアクラ海岸



湘南の海を考えるといっても、海にどんなルールがあるのか、何が課題なのかを知らないと話は始まらない——。そんな向上心から始まったコーナーです。

「海洋基本法」

日本の海岸線距離は世界第6位。
これを「地域」で管理しよう、という話

海の法律を学ぼう

1回目は2007年に制定された新しい法律「海洋基本法」を取り上げます。海洋基本法は、国際空間である海洋の新しい法秩序と海洋に関する諸外国の政策的枠組みに対応して、日本の権益の確保と国際的協調を図ることを定めています。

そして12ある基本施策の1つとして「沿岸域の総合的管理」が定められています。実はこの「沿岸域の総合的管理」が私たち湘南ビジョン研究会の取り組みにも重要なメッセージを示してくれています。

ところで皆さんは日本の海岸線がどのくらいの長さがあるか知っていますか？日本の国土面積は世界第61位に過ぎません。しかし海岸線の総延長距離約3万5000kmは世界第6位を誇ります（ちなみに1位はカナダ）。その沿岸を南西から黒潮が、北東から親潮が流れ、周辺の海域は世界有数の漁場となっています。豊かな漁業資源や海上交通の便益に恵まれた日本では、長い海岸線に沿って古くから特色ある地域社会が各地で形成されてきました。

そんな沿岸域をどのように開発、利用、保全、管理していくかは日本にとっていつの時代も重要な課題でした。特に20世紀後半からは経済、社会、環境の各方面で大きな変化が起こり、適切に対応することがより重要になってきました。具体的には1960年代の高度成長に伴う急速な経済活動の拡大、人と産業の沿岸都市部への集中による工業地帯の発展は、公害や環境汚染を引き起こし、海の水質にも大きな影響を与えました。こうした問題に対応するため、水質の管理を中心とした環境保全の取り組みがスタートしました。その一方で、国際的に普及しつつあった「地域」が主体となって環境問題に取り組む「沿岸域総合管理」という考え方、日本ではなかなか広まりませんでした。

海洋基本法がようやく制定されたのは前述した通りわずか4年前です。これにより長年懸案であった「沿岸域の総合的管理」がついに法律レベルで取り上げられるようになったのです。

地域が主体となって取り組む「沿岸域総合管理」の考え方。私たち湘南ビジョン研究会が活動の1つの柱として取得を目指す「ブルーフラッグ」の考え方と実はとても似ています。次回はその内容を詳しくご紹介したいと思います。

◆ 美味しい湘南



しらすと伊勢海老の 忠兵衛

旬が変わってきた。今年は（夏が旬の）アジが秋になつてもうまかつた。おい！お前らアジだぞ！いつまでうまいんだ！ってね（笑）

地物の伊勢海老としらすにこだわった「忠兵衛」は江ノ電江ノ島駅から江ノ島へとつながる洲鼻通りに店を構える。丼、定食から刺身の盛り合わせまで、地元漁師とのネットワークを生かした魚の鮮度が人気の秘訣だ。店頭の水槽には相模湾で獲れた伊勢海老。柔軟な笑顔が印象的な話し好きの料理長、加藤秀俊さんは海の食材に恵まれた湘南ゆえの「地魚」の難しさを語ってくれた。

伊勢海老とスミイカのお造り



営業時間 11時～20時(L.O)
藤沢市片瀬海岸1—11—25
コングラツ湘南1F
0466—27—1455

「以前水槽に小っちゃなイシガキダイがいたんだ。食べちゃうには忍びない大きさでね。そうこうしているうち愛着湧いちゃって、そななるともうペットだよね。小さいお子さんがあれ食べたいって言った時、思わずダメ！って言っちゃったもん（笑）。2年くらい生きてたよ。」

「魚が好き！」っていうお客さんが来てくれるとやっぱりうれしいよね」と言う加藤さん。訪れる方はおいしい魚もさることながら、サービス精神旺盛な加藤さんのトークも楽しんで欲しい。

広告募集

「読む湘南」は現在、製作者たちの熱意によってのみ支えられている、いわゆる「手弁当」です。より良いものを創るために、より良い明日の湘南を目指すため、「広告掲載」という形でご支援いただけないでしょうか。

個人、企業は問いません。「少しだけなら…」という方、下記アドレスまでメールにてお問い合わせ下さい。よろしくお願いします。

✉ shonan_vision@hotmail.co.jp

担当：窪田



お店は江ノ電江ノ島駅から江ノ島へと続く洲鼻通りのちょうど中間あたり